

第12回 外国語コンテスト

英語部門

英語部門は11月28日火曜日に行われた。今回は残念なことに応募者数がわずか3人と少なく、やや盛り上がりには欠けたかもしれない。

星野晶（ほしのあきら）君の“I shall rise”は自作の歌によるパフォーマンスだった。戴亜杉（たいあすぎ）君の“The friendship”は自分と古くからの友人との関係についてのスピーチだった。竹中治美（たけなかはるみ）さんの“Language ability changes with astonishing speed”は、自分が初めての中国滞在中に中国語の会話が進歩したことについてのものだった。

どれも素晴らしいものであったが、特に竹中さんのものは、新しい言語を学んでいて、その進歩が自分で実感できた時の喜びが、とてもリアルに伝わってきて、非常に優れたものだったと思う。その意味で、竹中さんが入賞者として最もふさわしかったと思われる。（多田哲也）

ドイツ語部門

2006年度の名古屋語学教育研究室主催第12回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2006年12月5日（火曜日）の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟204教室でおこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回課題としたのは、グリム童話のなかでもとくに有名な『ヘンゼルとグレーテル』の冒頭部分です。貧しい両親は自分たちの子どもを森に捨ててしまおうと話しています。それを聞いてしまったグレーテルは怖くて仕方ありません。しかしヘンゼルはグレーテルを励まし、何とかしてみせると約束します。この部分までを課題としました。

グリム兄弟による収集で知られる『グリム童話』は、使用されているドイツ語に関していえば、子どものためといいながらもその時代の古さから、実は決して簡単なものではありません。そのため今回は、理解の助けになるように詳細な注や解説もついたテキストを用意しておきました。それでも、授業ではまったく扱わないテキストですから、準備は大変だったはずで、にもかかわらず、今年は12名の参加者が応募してくれました。

審査にあたったのは、ドイツ語担当教員である法学部所属の竹中克英先生と経営学部所属の私（島田了）の二人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

すでに述べたように、内容としては決して簡単ではないテキストですが、参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、高いレベルで完成度を競う結果になりました。基本となる発音・アクセントの確かさはもちろんのこと、今回は童話ということで、より表現力が必要とされます。それでも決め手となったのは、発音・アクセントのより自然な表現であり、滑らかさでした。結果は、第一位（優勝）西田衣里さん（05J1353）、第二位岩田裕治くん（03J1265）、第三位山本裕子さん（05M3563）となりました。

ドイツ語の履修者が減っていくなかで、他の外国語に比べて参加者の数が少ないことは否定できません。しかしドイツ語の履修者全体に対する比率とその質の高さは大いに評価したいと思います。今後何らかの形で工夫を重ね、質の高さを求めつつ、同時に多くの参加者が集まるようにしたいと思います。法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心としたキャンパスのせい、たとえば、外国語の1クラスが40名を超えているなど、外国語教育の環境としては、現状は決して満足の

できるものではありません。それにもかかわらず、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

ドイツ語は、実用という点では英語や中国語などに比べて不利ですが、印欧語の文法的特徴が多く残っているため、外国語の学習をそのものとして楽しむことが出来る言語ではないかと考えています。一人でも多くの学生さんにこの楽しみに気づいてもらえたらと願っています。

最後になりましたが、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員の方のおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。(島田 了)

フランス語部門

フランス語部門のコンテストは2006年12月1日(金曜日)に実施された。例年であれば国際コミュニケーション学部 of ラッセン先生を審査委員長にお招きして実施するところであるが、ラッセン先生が海外研修中だったので、審査委員長は経営学部の田川先生、法学部の中尾が審査員として開催した。コンテスト出場者は16名で、フロアには50名以上の聴衆を集めてにぎやかに行われた。

昨年は参加者が少なかったので全員で予選と決戦を行ったが、今年は例年通り、予選と本選に分けて行い、予選では自作フランス語作文または課題の朗読を行ってもらった。課題の朗読には19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したフランスの詩人アポリネールの、日本でもおなじみの「ミラボー橋」(Le Pont Mirabeau)、本選ではジルベール・ベコーの名曲 Et maintenant (そして今は)を初見で朗読してもらった。自作の仏作文を用意してくれた学生は4名いた。

予選段階ではさすがに上級生が実力の違いを見せ、下級生にはなかなかきびしいコンテストとなった。田川先生と私の採点がほぼ一致し、半数の参加者が本選へ進出することとなった。本選は逆に

審査員にとってきびしいコンテストとなった。全員の発音がすばらしく、順位をつけるのが難しかったが、最終的には発音ミスの方がいくつだったかという本当に僅差の決着となった。入選者は以下のとおりである。

- 第1位 03J1292 成田 愛
- 第2位 03M3149 飯田 誓悟
- 第3位 05J1271 小田 知嗣

成田さんは正確な発音に加えて、フランス語独特のイントネーションや落ち着いた話しぶりが見事であった。2位の飯田君は成田さんとまったく甲乙つけがたかった。ほんの少し発音のミスがあった点が減点となり2位となったが昨年の1位に引き続いての入賞はまことにすばしかった。3位の小田君は2年生ながら、先輩に勝るとも劣らぬしっかりした発音が評価された。フランス語を学び始めて2年しか経っていないとは思えないほど、正確な発音で十分に練習してきたことをうかがわせた。

フランス語部門のコンテストにも全体の表彰式にも多くの学生が聴衆として参加してくれて、彼らの反応も気になった。単に先生が出席しなさいといったから来ただけだろうか、それともこの機会に何かを得てくれるだろうか、心配だった。しかし、コンテストが始まると、あちこちから驚嘆のため息やざわめきが聞こえてきて、どうやら私の心配は杞憂だったようだ。先輩、後輩、同級生たちがどれほど勉強しているかを目の当たりにして、よい刺激を受けてくれたのではないかなと思う。今後ともコンテストが単に優秀な学生の発表の場であることに留まらず、学生同士がお互いに知的な刺激を与え合う貴重な機会としますます発展していくことを願っている。(中尾 浩)

中国語部門 (法・経営)

第12回外国語コンテスト中国語(法学部・経営学部)部門は、11月16日(木)午後15時より、205教室にて行われた。参加者は全部で21名。内訳は、一年生が17名、二年生が3名、三年生が1

名であった。例年の通り、一年生部門と二年生以上部門とに分け、それぞれの課題文を朗読してもらい、発音の正確さを評価の対象とした。今年は一年生の参加が多く、反面、二年生以上の参加が少なかったため、レベル的には去年よりも劣るのではないかと心配されたが、参加者はおおむね家でしっかりと練習してきたようで、当初の心配は一掃された。入賞者については、激戦で判断に迷い、特に第三位を決めるにあたっては、四人の候補者にもう一度朗読をしてもらわなければならないほどであったが、結果として、以下の三名を入賞とした。

第一位 05M3326 川元彩加

第二位 05J1255 三島知佳

第三位 06M3546 鈴木優太

今回参加してくれた人には、これに懲りず、来年もまた発音によりいっそう磨きをかけて、参加してくれることを期待したい。また、今回は参加を見送った人も、今度は是非、積極的に参加してもらいたい。

(矢田博士)

中国語部門 (現中)

第12回外国語コンテスト中国語部門 (現中) は、2006年12月7日 (木) 13時30分から、課題部門18名、自由部門7名の合計25名が参加して行われました。審査は顧明耀先生、高明潔先生、安部の三名で行いましたが、今回は前回に比べ参加者が多く、また全体にレベルが高かったので、順位をつけるのが大変でした。参加した学生も、お互いにいい刺激となったようで、更なる研鑽を誓い合っていました。

課題部門は、「世界的中心」という文章を暗誦してもらいました。これはウイグルに伝わる阿凡提 (エペンディ) を主人公としたとんち話の一つで、世界の中心はどこかについての国王とのやりとりは、日本の一休さんに通ずるものがあるかもしれません。出場者は、内容をしっかり理解した上で暗誦しており、その表現力の豊かさに関心させられました。厳正な審査の結果、次の3名が入

賞しました。

1位 06C8084 盛田 美帆

2位 06C8064 谷崎 剛将

3位 06C8012 田邊 千香子

自由部門は7名の参加でしたが、出場者のレベルが例年以上に高く、激戦となりました。内容的にも、それぞれの経験を踏まえた説得力のある話が多く、審査員も審査を忘れ思わず聞き入ってしまうほどでした。このため審査は難航しましたが、厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

1位 02C8120 伊藤 佳寿子

2位 05C8150 伊藤 えり

3位 05C8106 加留部 瑤

1位の伊藤佳寿子さんは、「跳出排他性民族主义的圈子 (排他的ナショナリズムを乗り越える)」というタイトルで、中国留学中に経験した反日デモから、ナショナリズムとは何かを考え、それが持つ排他性に着目したものです。表現力、内容共に高い評価を受けました。2位の伊藤えりさんは、発音が非常に正確で、前回は課題部門で1位となっており、2年連続の入賞です。3位の加留部さんは、その落ち着いた語り口と内容が高く評価されました。

(安部 悟)

韓国・朝鮮語部門

外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」の本選は、2006年12月5日 (火)、16:40から実施されました。審査員は、今回初めてお願いした韓 銀英 (ハン・ウニョン) 先生と常石の2名が担当。

参加者は2年生を中心に、計32名。韓先生も驚くほどの、実力と熟演が繰り広げられました。審査の結果、次の諸君が入賞。

一位	03J1249	はっとり たけし 服部 剛士
二位	04M3244	にしむら かずき 西村 一騎
三位	05J1229	みつくり あゆみ 箕作 阿弓

一位の服部君は、韓国留学も経験している実力者。スピーチの内容は、インドのブッダガヤに一

人で旅行した際ユネスコに協力し、インドの小学生に授業をした時の苦労と感動について。留学経験者ということもあって、かなりのハンディーキャップを課していましたが、あまりに流暢かつ正確な韓国語発音が評価されたのが第一、第二にスピーチの感動的内容も評価されての結果でした。またこの場を借りて学生諸君にお伝えしたいのは、留学経験者が他の学生よりうまいのは当たり前、1年生より3年生がうまいのも当たり前。そのため公正を期すため、審査には上記のハンディーキャップ制度を採り入れています。(常石希望)

日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自らの体験を盛り込み、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題でした。

法・経・現中三学部の1年次の留学生は、毎年全員参加しています。60名近くにもなりますから予選を行います。予選は20名ずつに分かれたクラスごとに行い、それぞれ3名の代表者が選ばれ、計9名が本選に進みました。本選へは他の学年の留学生も自由に出場できますが、今回は申し込みがなく、2006年11月16日、1年生9名で競うこととなりました。

昨年は愛知万博の影響もあったのではないかと思います。日本で見た環境問題を題材にしたものなど多様な内容でした。今年もさまざまなトピックがありましたが、印象的だったのは、日本と中国の共通点や相違点を取り上げたものです。そうしたトピックは例年出ていますが、今年は客観的に述べられたものが多かったという印象です。したがって、その説得力は例年以上だったと感じました。イントネーション、間の取り方、アイコンタクトなど、聴衆との言語的・非言語的コミュニケーションを念頭にスピーチに取り組みました。どれも内容豊かで、聞き手を納得させるものでした。

審査は、日本語科目担当教員2名(架谷・梅田)、学生審査員2名(留学生・日本人学生ともにスピーチ入賞経験者)、聴衆約50名の投票によって行い、熱い空気の中、3名の入賞者(敬称略)が決定しました。

- | | | | |
|-----|---------|------|--------------|
| 1 位 | 06C8200 | 李 美珍 | 「多文化化する日本社会」 |
| 2 位 | 06M3316 | 孟 琳 | 「日本語の曖昧さ」 |
| 3 位 | 06C8209 | 宋 春雷 | 「私の好きな映画」 |

最後に一言。日本人学生のみなさんはコンテスト日本語部門には参加できませんが、ぜひ一人の聴衆として留学生の声を聞きに来てください。きっと新しい発見があるはずです。(梅田康子)